

二浦綾子

母

角川書店



母

三綾子

母

平成四年三月 十 日初版発行
平成四年六月二十五日九版発行

著 者 三浦綾子

発行者 角川春樹

印刷所 図書印刷株式会社

製本所 株式会社鈴木製本所

発行所 株式会社角川書店

東京都千代田区富士見二―十三―三

電話 営業部〇三―三八一七―八五二一

編集部〇三―三八一七―八四五―

振替口座東京三一―九五二〇八 下二〇二

落丁・乱丁本は小社通信販売課にて送料当社負担で
お取替えいたします。

Printed in Japan

ISBN4-04-872667-6 C0093



母

装丁 熊谷博人
写真 児島昭雄

第一章 ふるさと

第二章 小樽の空

第三章 巣立ち

第四章 出会い

第五章 尾行

第六章 多喜二の死

第七章 山路越えて

あとがき

年譜

参考文献

5

37

57

84

124

159

182

206

211

213

第一章 ふるさと

四月にしては珍しい、あつたかい日ですね、今日は。北海道の四月つたら、もつと寒いもんですけれどね。増毛ましげのほうの山も、はつきり見えて、海もきれいで、いい日だね。

それはそうと、本当にありがたいもんだねえ。わだしはね、再来年は数えて九十になるんですよ。こつたら年寄りが、こうしてみんなに、大事に大事にしてもらつてねえ。もつたいない話です。これもみんな、多喜二があつたら死に方ばしたからかも知れないねえ。

そうか、この年になるまでの思い出ば聞いて下さるか。何せ、ずいぶんと長い間のことだから、忘れたことやら、うる覚えのことやら、いろいろあるけど、それでいいのかね、あんたさん。

んだ、わだしはね、秋田の大館おほだての在に生まれてね、そう釈迦しよか内村うちむらつていう田舎でね。山がすぐ目の前まで迫ってくる、小さな小さな部落だった。夜、ふくろうがよく鳴いてね、その声が妙に淋しみしくてねえ。

人間って、あんなふうには鳥の声だの、木枯しの音だの聞いて、淋しいっていうことを、覚えるもんなかかね。わだし、ぼろ布団の中で、背中丸めて、ふくろうの声に聞き入っていたもんだ。

んだなあ、四つ五つの頃だった。今でもあの布団の中のあの姿は、どういうわけだか、はっきりと目に浮かんでくるんですよ。

そうそう、目に浮かぶって言えば、わだしの生まれた家の真向かいにね、巡査の駐在所があったつけ。それがあんたさん、今から何年前か前、釈迦内村に行ってみた時、まだおんなじ場所に、駐在所があつてね、懐かしいのなんのつて、ぶつたまげてしまったの。

昔、駐在所には、今考えれば五十に近い巡査がいてね、立派なひげを立てていたつけ。でも、いつもにこらにこらしていて、みんなに、「駐在さん、駐在さん」つて親しまれていたもんだ。その駐在さんが、どういうわけだか、わだしのこと、時々めんこがつてくれて、「おセキ、おセキ」つてね、ほんとにどうしたわけだったもなかね。

わだしが玄関の戸ばがたびし開けて外に出ると、駐在さんがうしろに手を組んで、駐在所の戸口に立っているの。そしてわだしを見ると、

「来い来い、おセキ」

つて、手招きしてね、わだしが喜んで走って行くとね、頭なでてくれたり、おめだま飴玉一つ口ん中さ入れてくれたりしたもんでした。それが何ともうれしくつてねえ。今でも忘れられないんで

すよ、あの飴玉の味がね。

何せ、わだしらの家ときたら、貧乏でなあ。少しばかりの田んぼの小作ばして、細々と生きていたからねえ、飴玉だの、煎餅だの、親からもらうなんてこと、滅多になかった。とにかく小作だけでは食って行かれんから、おつかさんが自分で打った手打ちそばを、街道を行く人に売っていたの。夕方になると玄関の戸ば開けて、お客さんがぼつらぼつらやって来てね、あれでも、一日十五、六杯は売れたべか。何せ明治の十年代のこと、そば一杯一錢という頃だったから、どれだけ生活の足しになったもんだかねえ。

ああ、当時、米一升七錢ぐらいだったべか。それはともかく、力一杯そば粉練って、ちよんちよんちよんと細く切って、大鍋で茹でて、タレを作って、それで一杯が一錢。それでも売ればありがたかったのね。

はあ、わだしは三つ四つの頃から、体を動かすことが好きでねえ、家の前を大きな箒草を束ねたもので、せつせと掃いたり、お客さんに、

「いらっしやい」

と、大きな声をかけたり、近所の庄屋さんちの赤ん坊を背中におぶって、子守りをしたりしたもんです。

何せねえ、三つ四つのちんこい子供が、赤ん坊をおんぶするわけだから、下手をすると帯がゆるんで、赤ん坊を引きずりそうになる。そんなわだしに子供をおんぶしなおしてくれたのも、

あのひげの駐在さんだった。

だから、わだしはね、おまわりさんというもんは、そりゃあ優しいもんだと、こんまい時から信じこんでいた。ほんとに、日本中どこもここも、優しい親切な駐在さんで一杯なんだと、かなりの年まで思っていました。

それはともかく、わだしは貧乏で、学校に行きたくても行かれなかった。わだしの村は、「釈迦内」なんて、ありがたいお釈迦さんの名前のついている村だともね、右ば見ても左ば見ても、みんな似たような貧しい家ばかりだった。屋根に柵まきば葺かいて、その柵を飛ばんように、でっかい石でおさえた家が、街道筋に、ひと握りほど建っていたような村だった。

学校さ行かれない子守りたちは、三人五人とつれ立って、学校の窓の下き行って、こっそりと先生のお話ば聞いたり、唱歌に耳ば傾けたりしてね。意地悪く赤ん坊が泣き出すと先生によつては、窓から顔ば出して、手を大きく振って、追い立てたもんでした。まるで、野良犬ば追うみたいにな、

「あつちさ行けつ、あつちさ行けつ」

てね。それでも、赤ん坊が眠るとね、また足しのばせて、こっそり窓の下に立ってね、こんまい体をゆすりゆすり、赤ん坊のお守りをしながら、浦島太郎の話だの、桃太郎の話だの聞いたりしたもんだつた。

八つ九つになるとねえ、おつかさんが、野良で忙しくしていても、わだし一人で、七輪さ火

ば熾おこして、ねぎ刻んで、あつたかいかけそばを、お客さんに出したもんです。わだしはね、さつきも言ったとおり、生まれつき働くのが好きで、おまけに人が好きでね、そば屋の仕事は何にも苦にならんかった。ま、三、四人も入れば、すぐに一杯になる店とも言えない店だった。こんまいわだしが、かけそばの丼どんぶりはお盆に乗せて、そろりそろりと運んで行くと、

「ほれ、駄賃だ」

と、五厘ごりんくれる客もいた。それがうれしくってねえ。野良から帰るおつかさんに、その駄賃を上げるのが楽しくてねえ。

楽しいと言え、お客たちがいろんな歌や、話を聞かせてくれるのも、楽しかったねえ。そんな時間いた歌にこんな歌があった。この歌は、どの客もよくうたったので、いつの間にか、わだしも覚えてしまった。ちよつとうたってみようかねえ。

人がなんぼ貸せといつても貸さないで

蔵の中の米ば腐らせて

空見て泣きべちよかきながら

川さ捨てる

ええ気味だ 角地の旦那だんな！

妙な歌だと思ふべね。秋田弁丸出しの、おかしな歌だと思ふべね。けど、どういふわけか、わだし、今になつてもこの歌が、ひとりでに口から出てゐることがあるの。ふと気がつくとうたつてゐるんですよ。秋田の先祖代々からの歌かねえ。

え？ いい歌だ？ どうしてだべ。こんな、人ば恨むような歌、いいことないべと思ふけど、釈迦内の子供たちは、みんなこの歌ば子守り歌にして、おがったのかも知れないね。これが貧しい百姓たちの、正直な気持ちだつたんだべなあ。

わだしが木村の家から、小林の家に嫁に來たのは、明治十九年の暮れのことでした。その冬一番の寒い日で、馬櫓ばまろがりりん鈴を鳴らして走る。雪が顔に刺さる。赤い角巻かどまきば手にしつかり持つてても、手も冷やつこい、足も冷やつこい。

小林の家まで、二里もあつたかねえ。まだ十四の、今で言えば十三の、西も東もわからんような子供が、嫁に來たわけだねえ。第一、嫁こになるといふことが、どんなことか、さつぱりわからんかつた。

それでも、どこの嫁さんも、きりきり舞いして働いてゐることだけは、知つていた。とにかくその日は寒くて、うれしいより悲しいより先に、足の冷たさが我慢できんかつた。十三の嫁こを乗せた馬櫓がね、右に左に揺れてね、誰か男の手に、背中ばしつかり支えられていたもんでした。

なんで昔は、あんな頑^{がん}是^ぜない子供ば、嫁に出したもんだかねえ。やつぱり貧乏で、口減らしのためだったべか。わだしより貧しい小娘が、街さ身売りさせられていた頃だからねえ。

婿さんはね、二十一で末松つぁんと言った。背の高い、優しい人だった。わだしは馬轡^{うまづま}から降りるや否や、

「寒い寒い」

と小林の家に駆けこんで、囲^い炉^ろ裡^りのそばに、冷たくてしびれそうな両足を、火にあぶったら、婿さんがそれはそれは優しい顔をして、じーっと見ていなさった。

嫁入りといつてもね、高島田^{たかしまだ}結^{むす}うわけじゃなし、角隠^{つのかく}りするわけじゃなし、桃割^{ももわり}れに、花模^{はなもど}様の銘仙^{めいせん}の着物着せられてね。そうだ！ 赤い牡丹^{ぼたん}の柄の帯をしめさせられていたつけ。紫の銘仙の羽織^{めいせん}着て、荷物は行李^{りょうり}一つに布団^{ふだん}だけ……。その行李もなあ、ぎつしり着物が詰まっていたわけじゃなかった。がふらがふらしていたから、普段^{ふだん}着の二枚もあつたかどうか。それにモンペ、野良着^{のらぎ}、手甲^{てがわ}などが入っていたのね。

それでも、足があつたまつたところで、三三九度の盃^{さかづき}をした。何しろ生まれて初めてお酒ば口に入れたわけだからね、むせてしまつて、誰かが背中撫^なでてくれた。

んだなあ、どんなごちそう出たっけかね。親戚^{しんせき}や近所^{きんじよ}の人が十五、六人も来ていたべか。嫁入りの夜のことは、さっぱり覚えていないの。ただ、家に入るなり、いきなり囲^い炉^ろ裡^りで足をあぶつたことだけは、はつきり覚えていてね、あとで思い出すたびに恥^{はにか}ずかしかったもんです。

でもねえ、小林の人は、誰一人そんな話はしたことがないの。わだしが嫁に来た小林の家には、婿さんの末松つあん、末松つあんのお父つつあんの多吉郎、その後妻のおツネさんがいたけどね。これがまたみんな優しいかった。おツネさんは末松つあんからみると、ママおつかさんだどもね、ほんとに優しいひとでね、わだしが朝起きると、

「よく眠れたかや」

と聞いてくれたし、寒い日は、

「風邪ひくなや」

って、気い使ってくれてね、顔もきれいな、心もきれいな、わだしにはいいお姑しゅうとめさんだった。た。

こういう人だちだったから、嫁入りの夜、いきなりわだしが囲炉裡に足ばあぶった話など、だあれもしなかった。

ああ、見合だったかって？ さあね、何しろ田舎のことだし、明治も十年代の頃のことだしね、見合も何もあつたもんじゃないわね。誰かが、

「どこそこに、ちようどいい娘つこがいるから、もらつたらどうだ」
とか、

「どこそこの息子は親孝行だから、嫁に行つたらどうだ」

のって、誰かが話を持ってくるわけ。誰も格別考えることもなく、嫁取りしていたようなも

んね。

わだしの場合、ちっちゃなそば屋だったけど、わだしが店に出ていて、働きの評判だけは、二里ほど離れていた小林の家にも、聞こえていたらしい。

とにかく、百姓が嫁つこもらうのは、器量より、働きの者が第一の条件でね。体が丈夫で働きの者ならよかった。

しかしね、あんたさん、十三でも十四でも、十七でも十八でも、とにかく嫁に行けた者は、なんぼ辛くても、まだ幸せだった。明治、大正、いや昭和の十年頃まで、東北の貧しい農家に生まれた娘たちは、一人前になるかならんうちに、女郎に叩き売られたもんだ。わだしの友だちも、一人や二人ではなかった。つまり、珍しいことじゃなかったのね。辛いも、いやだも、百姓の娘たちは言われなかったの。だって、家の中には、弟だの、妹だのがごしゃごしゃいてね、その誰もが腹ば空かしているの。

北海道の農家はどうか知らんけど、秋田では、四分六分の割合で、地主に米を納めなければならなかった。ろくに食べる米もなくて、辛い思いをしている兄弟たちや両親の姿が見たら、身売りするより仕方がないと、納得してしまうのね。

いや、第一、身売りつて、どんなことか、誰もよく知らない。

「いい着物着てな、白い米の飯も腹一杯食わしてもらえる、親には金がどつきり入る」

と、周旋人に聞かされると、自分から進んで、身売りの娘も何人もいたっていう話だ。

だども、うちの隣のヒサちゃん、駐在の裏のトミちゃんも、売られてから五、六年経って、体悪くして死んだと聞いた。だから、わだしには、今でもね、身売りしたひとの話聞くと、可哀相で可哀相でならなくなるよ。

あれまあ、何だって身売りの話になってしまったんだべか。なんだ、わだしが小林のうちに嫁に來た話をしてたんだっけね。

何せ、わだし十三だったからね。ママおつかさんの、つまりお姑さんば、

「おつかさん、おつかさん」

って、無邪気になついたもんだった。

わだしはねえ、裁縫所に通つたことなんか、なかつたの。何しろね、習いに持つて行く反物が無いの。だから、何も着物縫うことの知らない嫁さんだった。布団に綿入れることも知らん嫁さんだった。それを教えてくれたのが、このお姑さんだった。

このお姑さんは、わだしが数えて三十二歳の時、七十八で亡くなられた。その思い出す顔は、どれもこれも、目もと口もとが笑っていて、本当に優しいお姑さんだった。

そうそう、

「小林多喜二の家は、貧乏百姓だった」

と、あちこちに書かれています。そうだどもね、貧乏になつたのは、わだしが嫁に行く二、三年前のことだったらしいのね。小林の家は、下川沿村の川口つてところね、秋田から青森に行